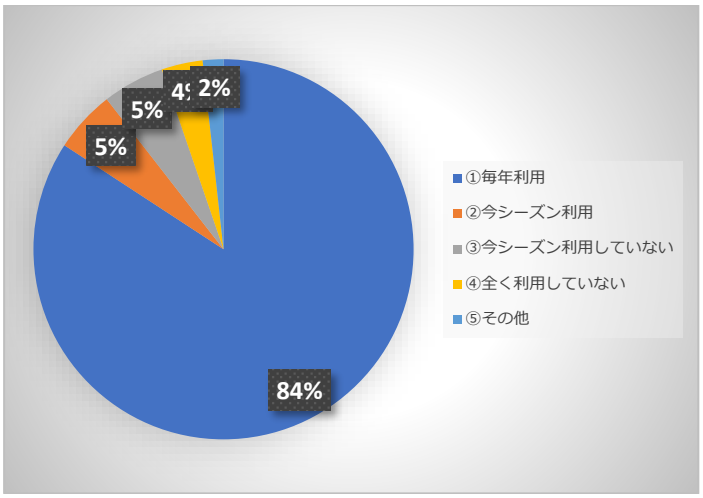
やぶはら高原スキー場アンケート集計（木祖中学校生）

□ 個人アンケート結果（回答者数 57 名）

1．あなたはお客（スキー・スノーボーダー）として、やぶはら高原スキー場を利用していますか。（1 つ選択）

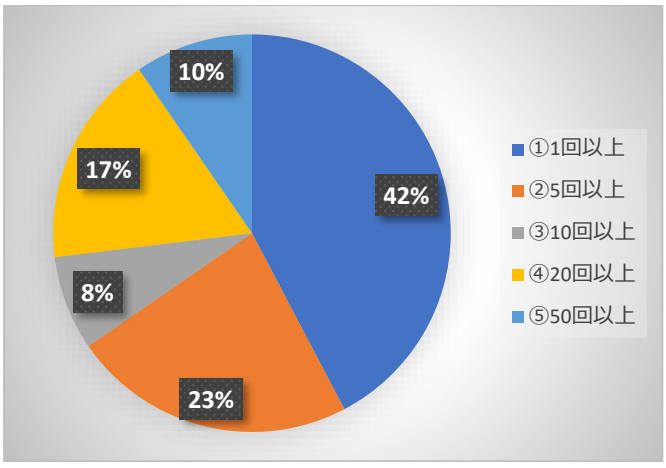
①毎年利用している
②今シーズン（2020-2021 年）は利用した
③今シーズン（2020-2021 年）は利用しなかった
④全く利用していない
⑤その他



スキー場を毎年利用している生徒が 84％となっており、「今シーズン利用した」生徒を含めれば 89％になる。一方、今シーズンは利用していない生徒が 5 ％、全くスキー場を利用していない生徒も含め 9 ％いた。その他の 2 ％は「スキー教室のみで利用した」との回答であった。

2．「1 」で今シーズンスキー場を利用した方に伺います。（1 つ選択）
あなたは今シーズン（2020-2021 年）どの程度スキー場を利用しましたか。

①1 ～ 4 回程度
②5 ～ 9 回程度
③10～19 回程度
④20 回以上
⑤50 回以上

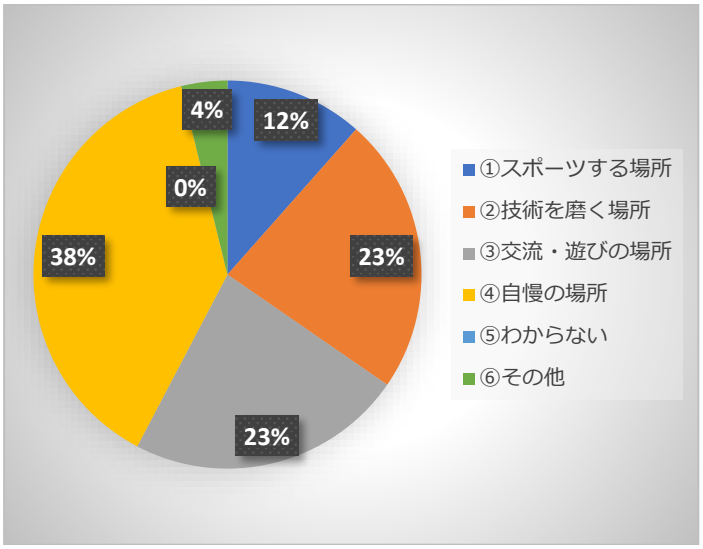


約 9 割の生徒がスキー場を利用しているが、 1 ～ 4 回の利用が最も多く 42％を占めた。シーズン中 9 回までの利用が全体の 65％を占めており、スキー場を利用している割合は多いものの、利用回数は 10 回未満の生徒が多いことがわかった。一方、20 回や 50 回以上の利用者が 27％あり、多くの回数を利用している生徒が 14 人いた。

□グループでのアンケート結果（13 グループ）

1．皆さんにとって「やぶはら高原スキー場」はどのような存在ですか。（2 つ選択）

①スポーツをする場所
②スキー・スノーボードの技術を磨く場所
③家族や友達などと交流（遊ぶ）する場所
④村の自慢の場所
⑤わからない
⑥その他（〔　　〕にお書きください。）

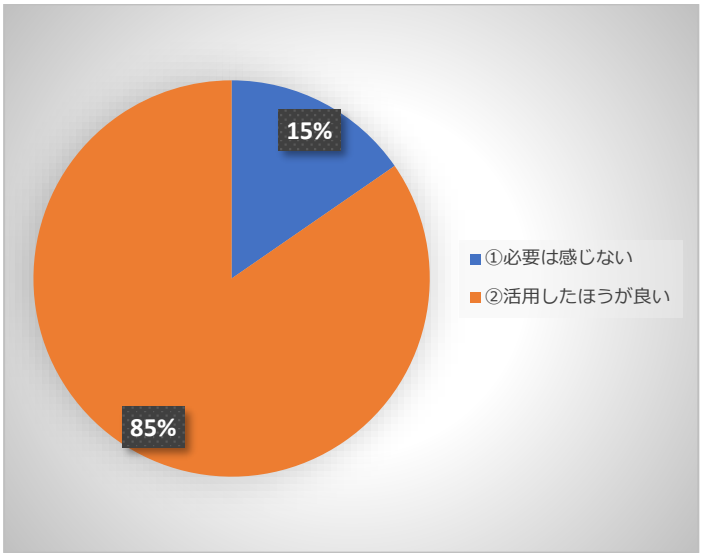


中学生にとってスキー場の存在は、「④村の自慢の場所」との回答が一番多く、全体の 38％を占めている。次いで「②技術を磨く場所」及び「③交流・遊びの場所」がそれぞれ 23％となっている。

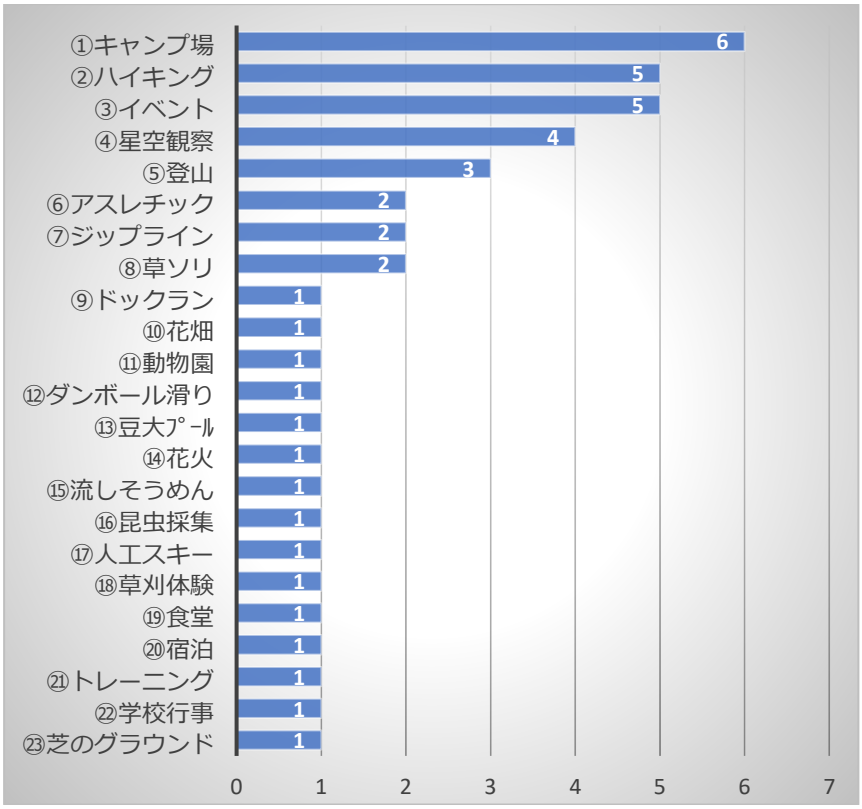
2．スキー場の夏場（グリーンシーズン）の活用をした方が良いと感じますか。（1 つ選択）〔選択した理由や方法を□にお書きください。〕

①活用する必要は感じない
②活用したほうが良い
③わからない

また、「その理由は何ですか。」「活用するとしたら、どんな方法が考えられますか。」を聞いた。



「夏場の活用をしたほうが良い」と回答したグループが 11 グループあり、全体の 85％を占めた。一方で必要は感じないとしたグループも 2 グループあった。



「活用したほうが良い」との回答の中で最も多い理由が「夏場も活用して収入を増やす」と言うものであり、その方法は「キャンプ場」との回答が最も多く、次いでハイキング、イベント、星空観察など、多額のお金をかけずに収入を得る方法の回答が多いことが特徴として言える。

3．スキー場を継続する場合、今後どのようなことが必要だと思いますか。（1つ選択）

〔選択した理由や方法を□にお書きください。〕

①リフトの本数を減らし、規模を縮小して続けていく

②レンタル・食堂等を含めて会社を一つにする

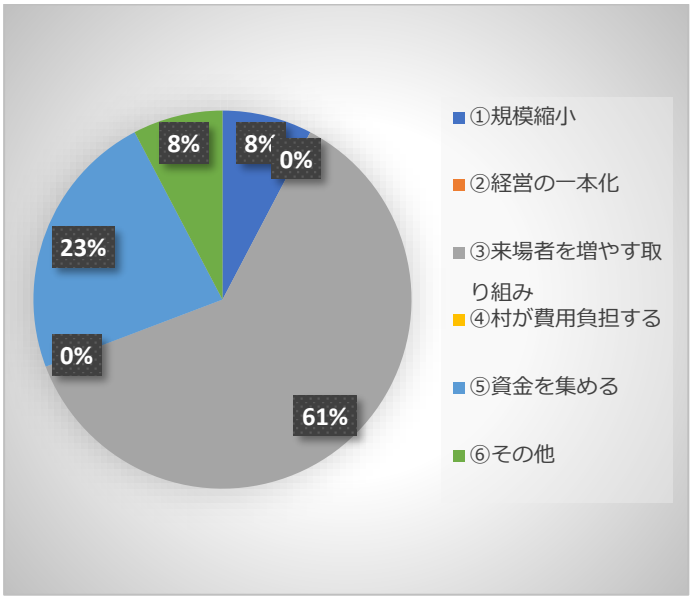
③来場者を増やすための取り組みを行う

④村も必要な費用を負担する

⑤村内外に出資を求め資金を集める

⑥その他

また、「その理由は何ですか。」、「選択した内容を行うために、どんな方法が考えられますか。」を聞いた。



スキー場を継続する場合、今後必要なこととして最も多い回答が「③来場者を増やす取り組み」であった。「⑤資金を集める」と言う回答が23%、「①規模縮小」との回答が８％

一方、「②食堂やレンタルを含めた経営一本化」の回答や「④村の費用負担」と回答したグループは無く、将来負担の発生や行政サービスの低下等に対しての危機感であると思われる。

来場者を増やす取り組みの方法として最も多い回答が、「ＣＭ・ポスター・チラシ・ＳＮＳ等の制作を行い宣伝する。」と言うもので、中には「クラウドファンディング・ふるさと納税等」の資金調達を挙げたグループもあり、一方で「木曽福島スキー場との統合」や「黒字経営者との合併」と回答したグループもあった。

4．スキー場を廃止する場合、他に何かアイデアはありますか。（１つ選択）

〔選択した理由や方法を□にお書きください。〕

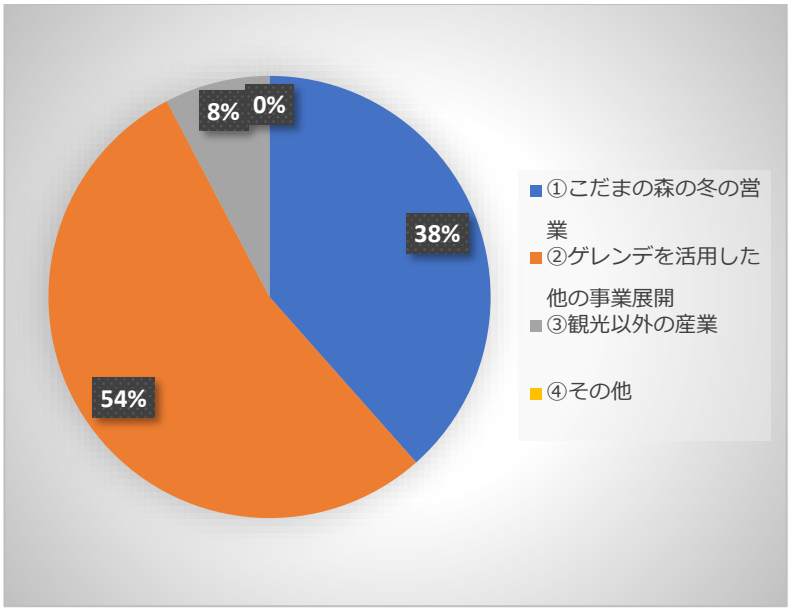
①こだまの森で冬に遊べるものを作り冬も営業する

②スキー場のゲレンデを活用した他の事業を行う

③スキー場やこだまの森等の観光以外の産業に力を入れる

④その他

また、「その理由は何ですか」、「選択した内容を行うために、どんな方法が考えられますか。」を聞いた。



スキー場を廃止する場合のアイデアとして「①こだまの森の冬の営業」及び「②ゲレンデを活用した他の事業展開」を選択し、最も多い回答がゲレンデ活用であった。その活用方法で最も多い回答が「キャンプ」や「ハイキング」であった。中には「農業・畜産・動物園」と回答したグループもあった。

5　その他、スキー場に対する要望

アンケートの設問以外にスキー場に対する要望を記入したグループがあり、その内容は次のとおりである。

・若者に人気のジャンプ台などを入れ、ボード利用者へのサービス向上

・一般客でも入れるポールコースを作る（金かけて）

【まとめ】

木祖中学校の生徒は、授業として「スキー教室」があることなどから、ほぼ全員がスキー場を利用しており、本村にスキー場があることを誇りに思っている生徒が多いことがわかった。率直な考え方と思われるが、村の費用負担を求めるのではなく「集客に力を入れることで現状の課題が解決できるのではないか」と考える生徒が多い。また、「グリーンシーズンにゲレンデを活用しないことはもったいない。」と考える生徒は多く、多額の投資を伴わないアクティビティを模索する動きが伺えた。